

発達 7-3

たくましい社会性に関する縦断的研究 (3)

○首藤 敏元 ・ 山岸 明子 ・ 二宮 克美
 (埼玉大学教育学部) (順天堂医療短期大学) (愛知学院大学教養部)

目 的

小学5年生と中学2年生を対象にした横断研究から、いずれの学年においても、子どもの学校生活の認知(主体性、協同)がたくましい社会性と強く関連することが示されてきた(1994, 1995)。本研究は、子どもの学校生活の認知が小学校から中学校への移行に伴ってどのように変化するかを縦断的に検討することを目的とする。また、学校生活の認知とたくましい社会性との関係の変化についても検討を加える。

子どもの学校生活の認知に最も影響を与えるものは実際の学校環境であろう。小→中の移行に伴う学校環境の変化には、個別の学校間の差異も含まれてくることから、本研究では調査対象を小→中の進級学校別に分類し、それを単位として分析を行う。

方 法

<質問項目> (1)学校生活の認知 (a)主体性

「先生は、生徒それぞれ自分のやり方でやるようにさせてくれる」「このクラスの生徒は、きまりが不公平だと思えば、そのきまりを変えることができる」など合計7項目(5段階評定)。(b)協同

「クラスのみんなは、仲良しではなくても、おたがい助け合っている」「クラスのみんなはあまり仲良しではない」など合計10項目(5段階評定)

(2)たくましい社会性 (a)調和 共感性と向社会的コンピテンスからなる14項目(5段階評定)。

(b)独自性 自立感と効力感からなる11項目(5段階評定)。

<調査対象者>前回の被調査者は5つの小学校(小A、小B、小C、小D、小E)に分かれており、本調査時には3つの中学校(中A、中B、中C)へ進級していた。そこで、次の5種類の小中学校の組み合わせを設定した。小A中A(n=75)、小B中A(n=75)、小C中B(n=118)、小D中C(n=46)、小E中C(n=72)(同じアルファベットは同じ学校を意味する)。

<調査時期・方法>研究(1)(2)と同様である。

結果及び考察

1. 学校生活の認知の変化

5(学校)×2(性)×2(時期)のANOVAを主体性と協同の各尺度得点について実施した。いずれにおいても学校と時期の交互作用効果が1%水準で有意となった(主体性; $F=11.11$, $df=4/368$ 協同; $F=4.77$, $df=4/372$) (Fig. 1)。多重比較の結果、小から中への主体性得点の変化は小C中B(小<中)と小D中E(小<中)で有意であった。協同得点では小C中B(小<中)のみ有意であった。中1時点での学校生活の認知には有意な学校差(A、B、C)は認められないため、小中間の有意な差異は小5時点での学校差が反映しているものと考えられる。

2. 学校生活の認知とたくましい社会性との関係の変化

小5の時点では、小D中Cを除いて、主体性と協同はそれぞれ調和と独自性の両方と有意に相関していた。しかし、中1の時点では、独自性と主体性との間の有意な相関が消失していた。また、中1の時点でも、協同と調和の間には一貫して有意な高い相関関係が認められた。

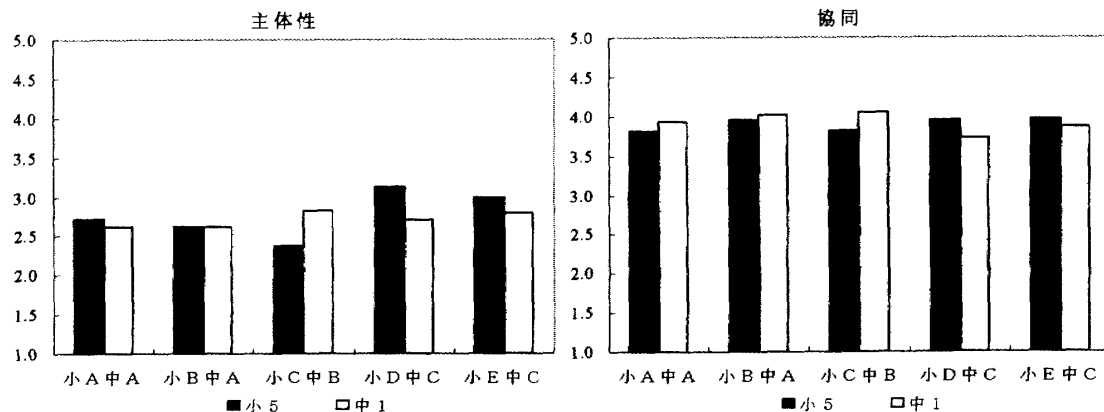


Fig.1 学校生活の認知に関する学校別縦断的变化